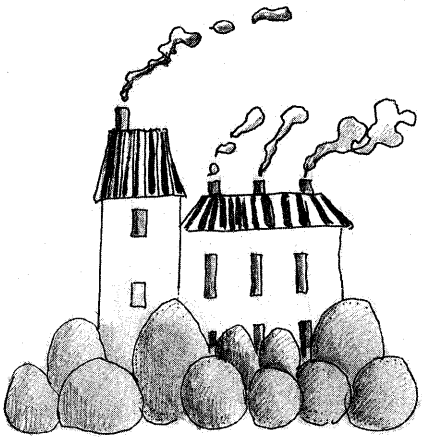
「住まい」のイメージ (2)

子どもの夢の家

～こんなおうちにすみたいな～

村松　明子

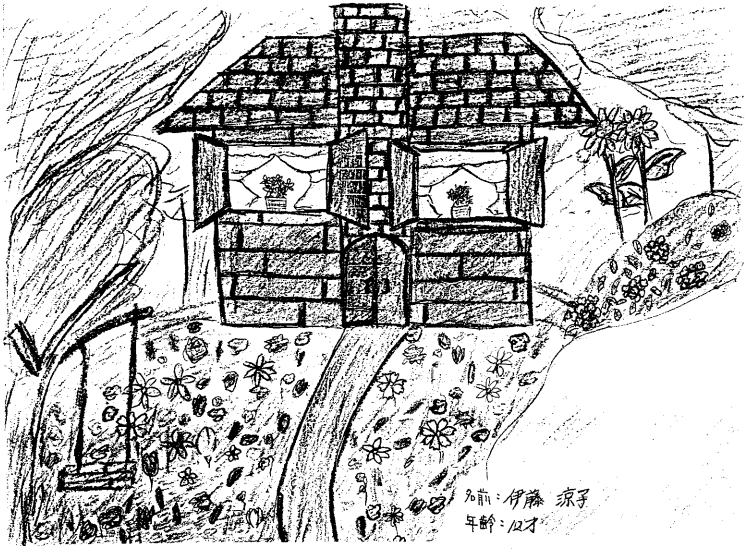


本田和子先生のご指導のもとに書いたお茶の水女子大学児童学科平成三年度卒業論文『子どもの夢の家―児童文化財をてがかりに―』の最終章で、私は、子どもの描いた絵をもとに、かれらが憧れる住まい像について考えた。その「子どもの夢の家」は、特徴別に四つに分けられて興味深かったので、ご紹介したい。

絵を描いてくれたのは、八歳から十二歳までの小学生二十人（男八、女十二、平成二年一学期当時）である。描画をお願いするにあたってのこちらからの指示は、『「こんなおうち（おへや）にすみたいな』という題で、自由に絵をかいてください」のみにして、描く側の住まいへのイメージを自由な方向へのばしてもらうようにしたつもりである。

a. 家タイプ

家の外観の様子を描いてくれたものは三点あった。どれも森や林を背景にした、赤い屋根と煙突があるれんが造りの山小屋風のもの。窓には白やピンク色のカーテン



◀ 図1　家タイプ

が下がり、花の咲く庭には池があり、木陰で読書する少女の姿やブランコ等も描かれてる。春夏秋冬それぞれの花がいちどきに咲き乱れている庭もあった。（図1）

山小屋風というより、別荘風といったほうがよいだろうか。家そのものよりむしろ背景の森や庭に重きがおかれて描きこまれているように思った。ハイジやアンなどの少女小説の住まいや、あるいは外国のお伽話の〝おうち〟を連想させる。自然の美しい景観の中という立地条件と、それにとけこんでひっそりと立っている伝統的な家という情景である。

b．おへやタイプ

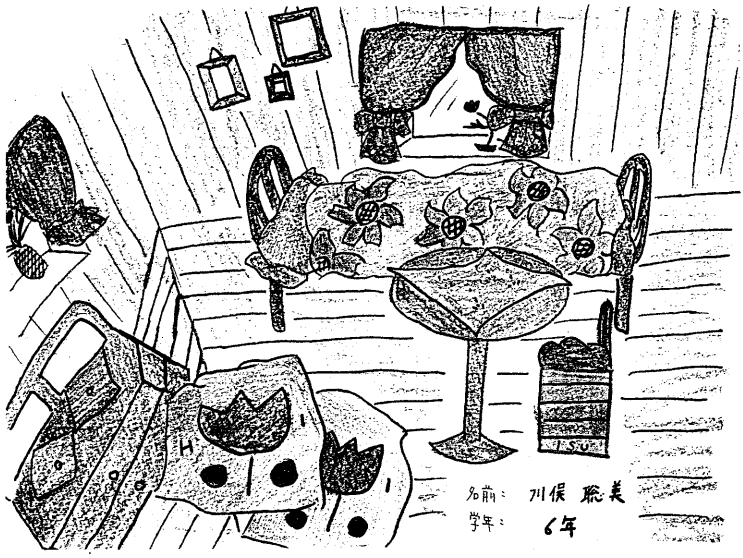
いわゆる少女趣味な〈かわいいへや〉を、六人の女の子（全員六年生）が描いていた。出窓のカーテン、ベッドカバーや枕はみな暖色でフリルがあしらわれ、ケーキと紅茶をいただくための小さなテーブルと椅子のある、ゆったりとした洋間、という典型的なものだ（図2）。他に暖炉・クッション・花・ソファ・額縁などが多く見られる。アンやローラの時代を彷彿させる、木や布で作

られた調度にかこまれた部屋。うつわ（部屋）よりも、なかに置くモノの選択と組み合わせに重きがおかれている。

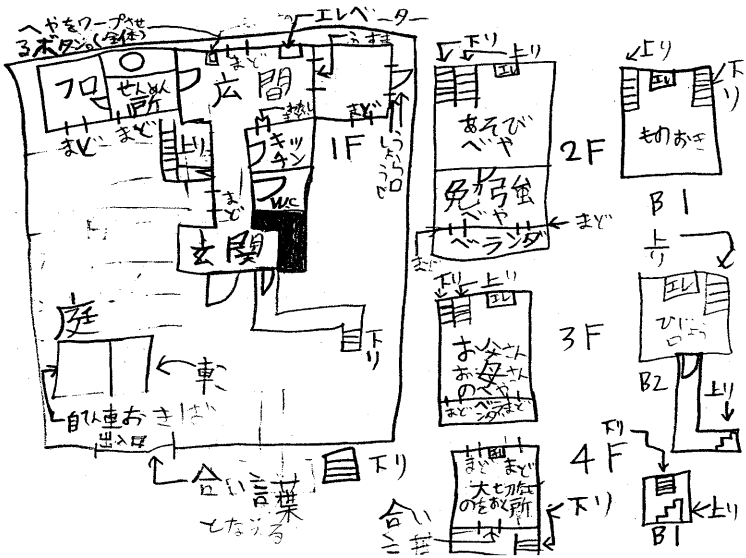
すなわち、以上a・b二項の要素をあわせると、〝花いっぱいの庭や自然にかこまれた、かわいいモノばかりのおへや〟という、住まい像がうかびあがってくる。それは少女小説等の住まいから出発して、大人になっても一つのスタイルとして受け継がれていく、住まいの理想像の一つであるようだ。余計なお世話だが、そんな〈かわいい〉住まいにはやはりサラリーマンのお父さんが共存する余地はなく、夢見る少女が独りで暮らす場にしかなりえないといえよう。

c．間取りタイプ

高学年の男女四人が、住宅販売のチラシによくある間取り図のような絵を描いていた。大きな四角い枠の中をいくつもの個室に区切って、玄関・台所・風呂・家族員それぞれの部屋というふうに、用途が書き込まれている（図3）。二階・三階建てのものが多く、広くとった庭の



▶ 図2　おへやタイプ



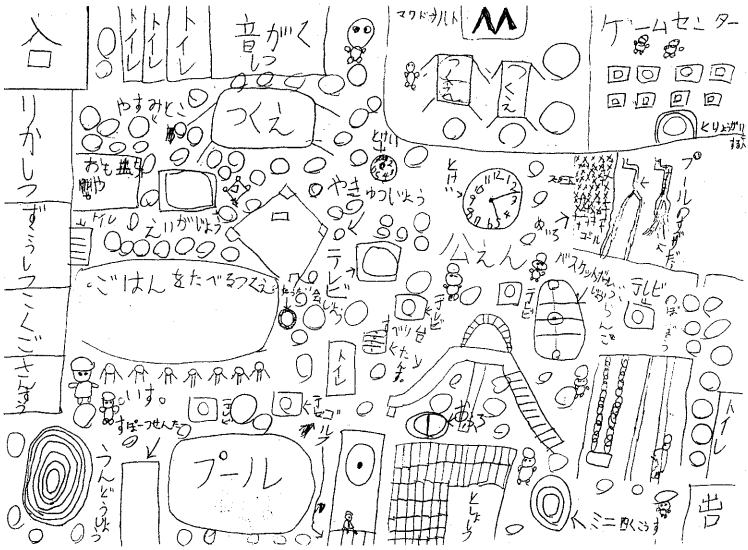
◀図3　間取りタイプ

敷地の部分には車庫や自転車置き場も設けてある。窓の位置やドア・階段を意味する建築記号が描かれているものもあり、実際にチラシ等を眺めたことのある子どもが〝設計〟した家なのであろう。カウンター式のキッチンや、二階にもトイレ・洗面所・電話があったりと、かなり現実的なイメージが取り入れられて描かれているので、彼らの現在の住まいと比較すると興味ぶかいことと思う。またこのタイプのものは、家族との同居が当然の前提になっている点も興味深い。家族と共に住まう場合には、家の広さ・部屋の数といった量的ゆたかさも、理想の住まいには欠かせないようである。

最近のリカちゃんハウス等の市販ドールハウスは、床面重視で部屋数が多いタイプのものが増えているが、こういった、たっぷりした間取り全体を眺めて遊べるところも魅力の一つなのだろう。

d．アミューズメントとりこみタイプ

十歳前後の六人は、家にある一般的な部屋や調度をひととおり描いた上で、さまざまなアミューズメント要素



▶ 図4　お楽しみとりこみタイプ

を描き足している（図4）。庭に温泉・プールや野球場や、はてはマクドナルドのあるものまで、実にたくさんの設備が描き込まれていて、見ていても飽きない。住まいとスポーツセンター・学校・遊園地などがドッキングしてしまったようなものだ。すべり台やおもちゃ屋やバスケットボール場やミニ四駆コースなど、あふれんばかりの設備の隙間をぬうようにして、箪笥や食卓が描かれているものもあり、ひとつひとつに目を移していくのが楽しい。およそ生活感からはほど遠い住まいだが、彼らにとっての楽しみのありったけをそのまま取り込んだ、まさに夢の住まいなのであろう。家に取り込むということは、所有するということである。すなわち、いつでも好きな時に、すきなだけ（使用料金を払うこともなく、混雑することもなく）遊べることの愉しみだ。ファミコンをはじめとして、ゲームセンターでしか遊ぶことのできなかったいわゆる「アーケードもの」といった玩具（モグラたたき・クレーンなど）がつぎつぎと商品化されている風潮と重ねることもできよう。

残り二点は、〝飛ぶ家〟であった。ピンク色の外壁に星のマークが散りばめられて雲の上に浮かんだ家を紙いっぱいに描いたものと、〝飛ぶ島〟なるもののうえに建てられた二階家やマンション。後者には、下界（池袋）の風景がことこまかに描きこまれている。描いてくれた子どもは、池袋沿線のベッドタウンに住んでいるらしい。「長いこと電車に乗ったりせずに、家に居ながら、好きな所へ行けたらいいな」という願いを、このようなかたちでかなえてみたいのだろう。

以上、子どもたちの〝夢の家〟を四タイプに分けて紹介し思うことを述べてみたが、どの絵からも共通して感じられるのは、ありたき住まいへのイメージがたいへん具体的で、「自分の身のまわりを思う通りにしてみたい」(注)ということどもの想像の世界が、見るものをぞくぞくさせるような興奮と楽しさを伴った絵と言葉で表現されていることである。部屋やモノの様子がこまごまと描きこまれていて画面からあふれんばかりのエネルギーは、生活の場である住まいへの愛着とそれゆえのさまざまな願望と遊び心にささえられているのではないだろうか。

住まいは人間にとって日常に一番基本的な空間であるといえよう。それだけに愛着や関心は大きいし、また日常的であるがゆえに、ほんの少しでもその位置からはずれると、たちまち夢や空想の世界へと浮遊しうるのではないだろうか。アミューズメントとりこみタイプの家はもちろん、おもうぞんぶん少女趣味な家や、〝間取り型〟のように部屋のたくさんある家なども、子どもにとっては(大人にとっても)ながめ想像して愉しむ〝夢の家〟なのだと思う。

注　延藤安弘『こんな家に住みたいナ』(晶文社、一九八三、p.22)

（玩具メーカー勤務）